

---

# ポレポレ物語

須田 継

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポレポレ物語

### 【Nコード】

N9467L

### 【作者名】

須田 継

### 【あらすじ】

人の生き様と言うのは、案外笑えるものなのかもしれない。

姉に言われた一言「お前の人生ってギャグだね」から作り始めたエッセイです。

基本的に実話ではある物の、コメディティスト。

登場する人物名は全て適当に差し替えてますが、こういう人生もあるという事で楽しんで頂ければ。

物語の最後には、須田がレベルアップします。

書いていて『他人の不幸は蜜の味』なのだと思えて落ち込みつつ

不定期連載です。

## 宿題じゃない工作

小さな子どもと言うのは、誰かに踊らされる事などざらだ。

小学校低学年の頃、私は母親に連れられて稲荷神社のお祭りに来ていた。

狭い範囲ながらも、いつもと違う出店と人でごったがえした場所は、ちよつとした異世界。少ない額のお小遣いを握りしめて、私はキヨロキヨロと出店を見回す。

りんご飴や綿菓子、クレープといった甘い香り。お好み焼きやたこ焼きのソースの香り。そしてお面やコマのオモチャ。子供にとつての誘惑に満ちた空間で、私は親の姿を探す。

もちろん、「あれを買って」「これを買って」とおねだりするために。

近所に住む友人たちも、親にねだって既にオモチャを手に入れているのだし、買ってくれるはずだと思い込んでいた。

「これ買って」

私が指したのは白い棒に斜めのラインの張った長い紙をぐるぐるに巻きつけたもの。軽く振るとシュルシュルと伸びる。

友達がそれで遊んでいる姿を見て、どうしてもほしくなってしまうった。

しかし、私の握っているお小遣いの額では、残念ながら手が届かない。

期待のまなざしで母を見つめる。

しかし、母はこういったベクトルでは非常に厳しい人だった。

「ダメ」

綺麗に夢をぶち壊される。

当然、それには駄々をこねて対抗するが、追い打ちは予想もしない方法だった。

「自分で作りなさい」

小学校低学年に無茶を言う母。

まあ、確かに作れないことはない仕組みだ。だが、それは大人から見た視点でのこと。小さなお子様にそのレベルの想像力を求めるのは、今思えばスパルタも良いところ。

しかし、私は見事に母の手の平で踊らされた。

家に帰った私は、珍しい丸い割り箸を取り出し、古い新聞とセロハンテープ、ハサミを取り出す。

新聞紙を同じ幅でジョキジョキと切り、セロハンテープでつなげて長い一枚の紙にする。その作業をひたすら行う。

ある程度の長さになったら、今度は丸い割り箸に長くなった新聞紙の端っこをぺたぺたとセロハンテープで張り付け、巻きずしの如くぐるぐるぐる……。最後までまき切ったら、台所からゴムを取り出し、固定。

二時間ほどひたすら待った。

ちなみに、この工程は自力で編み出している。

待っている間はまだかまだかとサンタクロースを待つ気分である。そして、うまくいくかどうかの期待と不安で胸がいっぱいだったの

を覚えている。

そして、時間は来た。

ゴムを外す。まずは巻かれた状態で固定されているかどうかの確認だ。

うまく、固定されていた。

喜び勇んで、今度は動かす。シュルシュルと、それは動いた。完璧だった。祭りで友達が遊んでいたものと同じ動き。

最初は感動でいっぱいだったのだが、三回ぐらい繰り返し遊んで冷静になった。

白黒だから、全然綺麗じゃない。

一週間足らずで、飽きたのだった。

須田はレベルがあがった。  
賢さが2あがった。  
器用さが2あがった。  
センスが1あがった。

## 宿題じゃない工作（後書き）

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。

思いついた時に少しずつ追加していこうと思いますので、暇な時にお立ち寄りいただければ幸いです。

幼少〜現在までにあった色々と順不同にアップして参ります。

エッセイは初めてですので、誤字脱字・ツッコミ・感想をお待ちしております。



## おままごとは危険がいっぱい

おままごとは、予想だにしない危険と隣り合わせだったりする。

海のある町で育った私の友達は、漁師を親族に持つ人が多く、かなり性格が荒い。

荒いのは性格だけでなく言葉もそうだ。海言葉のなまりの薄い私ですら電話をしている姿を見られて「喧嘩してるみたい」と都心部に住む友人に言われる。

そんな言葉も性格も荒い友人たちに囲まれつつ、私はおっとりとした子どもだったため世話をよく焼かれた。

常にぼーっとしていた私は、彼女達から見ればかなり放っておけない油断しまくりのように見えたらしく（実際油断しまくりだったわけだが）、様々な場所に引っ張りまわされた。

ある時は山の獣道の先にある木の上の秘密基地。

ある時は採石場跡の崖を登った先にある小さな稲荷様。

ある時は砂浜で荒波に巻き込まれたり。

激しくいろんな場所に連れまわされていた私だが、小学一年生のあたりによく行った場所がある。

港にある鉄筋コンクリート系の資材置き場。

資材と言ってもゴミの部類だったような気がする。

港はサザエやアワビの貝殻が多く、また枝も漂着する。そして極めつけは勝手に生えてくる海藻と雑草。

これらを使ってやる事は、おままごだった。

「けいちゃん、水くんできて！」

資材置き場のコンクリートのお家で、お母さん役のようちゃんが指示を飛ばす。彼女は尖ったコンクリートを使って海藻を切っていた。お料理中という事だ。

「わかった」

素直に私はうなずく。片手に空のファイ・ミニのビンを持って、コンクリートの堤防の上を歩いた。

堤防から慎重に降りて、海水を汲む。

波が来ない場所で汲めれば良いが、海水が汲める場所と言うのは波が来ている場所だ。おかげで、靴はびしょびしょ。

しかし、当時の私にとって『ようちゃんの命令は絶対』だったため、内心では嫌に思いながらもバシャバシャと海に入る。

その動作は子どもの割にはのんびりしているため、私が半ば海に入って水汲みをしている後ろを一緒に遊んでいるゆりちゃんが駆けていく。基本、ようちゃんもゆりちゃんも体力のある健康優良児である。ちなみに私は不健康優良児だ。

水を汲み、今度は堤防を登る。

ゆりちゃんはひよいひよいとジャンプで駆けのぼってしまいが、私にはそんな事は出来ない。

体力がないのも理由の一つではあったが、当時は珍しかった喘息との付き合い方を、その頃の私は習得していなかった事が大きい。

とにかく分かっているのは、走ったり跳んだりすると息がでなくなる事があるという事。夜中に呼吸困難を起こして大泣きをするなどざらだったため、その恐怖は完全に刷り込まれていた。

今となつてはどの程度運動すると喘息が発症するか把握しているため、運動を恐れる事もなくなった。しかし、小さな子供に『このぐらいの症状が出たら運動をやめれば良いんだよ』などと分かるはずもなく、研究も進んでいなかったため教えてくれる人もいなかった。

普通、こうなった場合は喘息を起こさない運動（水泳等）で体を鍛える、という案を思いつく。

しかし、私は怠惰だったため、『運動しなきゃ喘息起こらないよ』と言う結論に達していた。（酷い）

そんなこんなで私は大周りをしてよつこらしよと堤防に上る。その頃にはゆりちゃんや海藻をようちゃんに渡して、再び港へジャンプしていた。（怖がりな私には、堤防の比較的高い場所から港に飛び降りるのも無理だった）

捨てられたコンクリートが橋のようになっている場所を歩き、私はようやくようちゃんの所にたどり着く。

「はい」

「ありがとう」

お礼もそこそこに、ようちゃんはお水を受け取って海藻にかける。カチコチになりかけていた海藻が再び柔らかくなっていた。

「じゃ、もう一回」

そう言って再びビンを渡される。私は「はい」と返事をしながらコンクリートの橋へと一步踏み出した。

その時、悲劇は起こった。

ズル

踏みしめたはずの足が綺麗にスライドする感触があった。スローモーションで流れる景色の端に、落ちた海藻が見える。

自分の足は現在濡れていて、踏み込んだ先には海藻がある。濡れた海藻と言うのは、かなりぬるぬるしている。

空が見え始める景色の中、ヤバいと思う間もなく本能的に体をひねった。何せ、自分の体は後方に倒れているのだから受け身が必要だ。

体は何とか回転したものの、残念ながら回転した《だけ》だった。

ゴン

そんな感じで、私は頭をコンクリートにぶつけた。

あとちよっとずれていたなら、錆びついた鉄の方にグサリといったご臨終だったかもしれない。

そういう意味では運が良かったのではあるが、これは序曲だった。

何せ、私はこの時頭が痛いというよりは、すりむいた膝が痛かつ

ただ。

痛いよお、と顔を歪めながらようちゃんを振り向く。ちょうど、  
ゆりちゃんも海藻をとり終わって堤防の上にいた。

二人は、口をあんぐりと開けてこちらを凝視していた。

二人の姿を疑問に思いながら、私は打ったおでこの左側に手を当  
てる。何か、濡れた感触があった。

そのまま手を見ると　赤い、というか紅い。

これ？　血？

気づいてしまうと急に恐怖が這いあがる。恥も外聞もなく、私は  
大泣きした。

大泣きする七歳児に二人がようやく正気に戻る。

「私、お母さん呼んでくる！」

家が一番近いようちゃんが、母親を呼びに走りだす。もっとも正  
しい判断だ。

そしてここから、ゆりちゃんの錯乱がすごい事になる。

「傷口洗わなきゃ！」

泣いている私の手をとって、彼女は傷口を洗おうと港に向かった。

そして私の手を引き、あろう事か海水で傷口を洗い始める。

彼女の中の知識として、海水には傷口を早くふさぐ作用があるというものがあつた。ただし、この知識には決定的に欠けている点があつた。『かさぶたが出来た状態』での話なのだ。

傷口から血が流れているような状況では当然適用されない。それどころかかえつて感染症とかの危険が増すのだが、幼子二人にそれが分かるはずがない。

あわてて駆けつけたようちゃんの母親は、私を家に連れていくと傷口を消毒してくれた。

あまりの恐怖に大泣きし続けていた私を、私の母が迎えにきた。その頃には消毒されたガーゼが私の額に当てられていて、血がだらだらと流れるホラーチックな状態からは何とか脱している。そんな私の手を母は引いていく。

私はこの後について考えては戦々恐々としていた。

頭を強打して血を流したのだ、病院に連れて行かれるかもしれない。

病院に行ったら、針で縫われるのかもしれない。頭の検査とかもするのかもしれない。それはもしかしたらとても痛いかもしれない。

子どもにとっては恐ろしい想像が頭の中を行進する。

そして、家についてしまった。

上の兄弟たちは私が頭をぶつけた事を知っていたらしく、母に「

大丈夫だった？」としきりに聞いていた。

そして母の結論は私の予想の斜め上を行っていた。

「こんなもん、絆創膏はつときゃ治る」

そうして、私の大怪我は幕を閉じた。

わけでもない。

ここからまた別の恐怖が待っていた。

「はい、痛くないよ」

普段以上に優しい声音で私をあやす母。しかし、それは一層恐怖をあおってしまう。

「や、やだ」！

泣きながらプルプルと首を振るが、ガシッと母は私の頭を固定した。

「はい、すぐに済むから　ねッ」

完全に不意打ちで私の絆創膏がバリッと剥がされる。そして

「ぎゃああああッ!!」

余りの痛みに悶絶する私。

額と髪の生え際との境に出来た傷跡をふさぐ絆創膏は、見事に私の頭髪を巻き込んでいた。

一気に行われるその痛みは、粘着力の強さと相まって尋常じゃなかった。

この痛みが三回繰り返されたあたりで、私は『縫われた方が良かったんじゃないだろうか』と思ったり思わなかったりした。

須田はレベルがあがった。  
体力が1あがった。  
トラウマが増えた。



## おままことは危険がいっぱい（後書き）

しょうもないお話を読んでいただきまして、ありがとうございます。私としてはトラウマになるほど嫌な思い出なのですが、客観的にみるとかなり面白い事らしいです。実際どうなんでしょう……。

## 夢は寝て見る物なのさ

夢と言つのは突拍子もなく、けれど気付けば楽しいものでもある。

もちろん、これは寝てみる夢の話だ。

夢を見ないという人もいるが、夢の中の記憶は消えやすいので忘れてしまっているだけだと言われている。

私はと言えば、覚えている時は覚えている。しかも非常にアレな夢を。

中学の頃の夢としては、こんなものがあつた。

小学校以来の親友であるりっちゃんが、私に笑いかける。

「実はね。免許取ったんだ！」 注：この時の私の年齢は十四歳

夢の中なので、一般常識など思い出せない私は「へー、すごいね」などのん気に相槌を打つ。

そして、これでこの夢はオチない。

「だからさ、けいを乗せてってあげる！」

軽車両に搭乗させられる私。唸る爆音。飛ばされていく人々。

起きた時は汗びっしょりだった。

これと同時期に見た夢にこんなものもあった。

出掛けようと家を出ると、ばあちゃんが車をふかして待っている。  
ばあちゃんこの時八十歳。

「はよ乗れ！」

乗せられる私。唸る爆音。飛ばされていく人々。でこの夢は終わらない。

湖に突っ込む車。ひび割れていくフロントガラス。

こんな感じでフェードアウトしたので、やはりこの時も動悸がすごかった。

最近よく見る夢はこんな感じ。

いつも通りに車を走らせて会社に向かう。

その道のりの途中には百メートルほどで終わるトンネルがあるのだが、

出口につかない。

遅刻してしまうと焦る心。それでもつかない。

心の中で叫びながらフェードアウト。

こうやって書くと思夢しか見ないように見えるが、そんなことはない。

どこかのホテルに遊びに来ているらしい私と姉。

「そろそろ帰ろうか」

姉が言うので私はうなずく。

二人でエレベーターに乗って降りると、何故か家。

おかしいと思って振り返ると、仏壇の位置にエレベーターがあり、

それが回転扉よろしくくるっとまわると仏壇に……。

「何これ!？」

「お前知らなかったのか？」

平然と仏壇の隣の柱を姉が押すと、くるりと回ってエレベーターが現れる。

家を改造してしまっている夢はこれだけではない。

家で鬼ごっこをしていて、何故か居間（床は畳）に暖炉がある。

夢の中では鬼から逃げるのに必死で暖炉に隠れていたが、起きてみるとツツコミ所満載である。

他にも、私は明晰夢めいせきむを見た事がある。

明晰夢というのは、夢の中で『これって夢だ』と気付いた上で見る夢の事を指す。

ゲーム脳の人だと見やすいらしいので、心中複雑なのだが、これが楽しい。

家にいた私は、これは夢だと気付いたため、ベランダから飛ぶ。夢の中なので、身一つでパラグライダーの如く空を飛んで楽しんだ。

しかし、残念なことにこの夢、『私が現実でできそうと思っている事』を限界としているらしく、成層圏まで飛ぶとかは出来ない。

なので、一番最初の明晰夢は悲惨だった。

庭で飛ぼうと思い立った私は、ぴょんとジャンプして浮いた。

浮いてはいたし、前進もしていたのだが……

地上五センチメートルをふよふよと浮いて移動していた。超低速で。

歩いた方がまだ早いような速度だった。

須田はレベルがあがった。  
センスが1あがった。  
明晰夢を見れるようになった。  
精神ダメージを5受けた。

## 後から知る真実は痛い

自覚の薄い本当の事ほど、知った時にはショックを受ける。

仕事で疲れ果てた私を、当時二トだった姉が迎える。時間は深夜11時といった所。

仕事柄、忙しい時には職場で徹夜なんて事もあるため、深夜は起きている姉との唯一のコミュニケーションの時間（姉が夜型の為）。私はものすごい朦朧としたまま受け応えるわけだが。

「どんちゃん。お前の母子手帳が出てきたよ」

書類整理をしていた姉が、懐かしグッズを引つ提げて目の前に現れた。ちなみに、どんちゃんとは私と姉のお互いの愛称である。由来についてはまた後日。

「相変わらず何でも取っとくね」

言いながらも、若干興味をひかれて私は母子手帳を受け取る。取っておいたのはもちろん母だ。

他にも私と姉が使っている部屋のテーブルには、幼稚園ぐらいの頃の絵が並んでいる。

これらも子供らしい『デッサン？ 何それおいしいの？』的な絵だらけなのだが、文章で表わすのは難しい面白さなので割愛する。

「何、どんどの母子手帳もあんの？」

姉を愛称で呼びながら、もう一冊の母子手帳を眺める。当然ながら、両方ともかなり古びていた。

「うん。読み比べようよ、どんちゃん」

「しょうがないなあ」

どっちが年上だかわかりやしない会話を繰り返しながら、私と姉はお互いに比べ始める。

「出産時の体重」

「あ、どんちゃんの方が重い」

「今じゃ逆転してるけどね」

「むにゅ」

「あ、どんちゃん頭ぶつけてひきつけ起こしてる」

「それってそのぐらいの時に起こしたんだ」

「うん。テーブルの角に頭ぶつけて白目むいてた。覚えてる？」

「一歳にすら満たない人間が覚えられるわけないだろ」



「あ、この時点でどんだんに体重こされてる」

「なぬっ!？」

などと盛り上がっていた私達だったが、突然姉が大笑いし始めた。

「何だよ、近所迷惑な」

「だ、だって……ぶっ……どんちゃん、これっ……ぷはっ」

全く笑いをこらえられていない姉をいぶかしみつつ、私は姉の読んでいる私の母子手帳を見た。

一般的な定義として。

赤ちゃんは、お座りするようになったら、ハイハイで動き回り、つかまり立ちできるようになります。

一応、母子手帳には八カ月ほどでハイハイするようになり、十か月ぐらいしたらつかまり立ちすると書いてあります。

私は十カ月たったあたりでつかまり立ちするようになり、一歳になる数日前にハイハイするようになったようです。

それまでの間は当然座ることしかできなかったでしょうから、座ったまま「あれ取って」と指さしたりしておもちゃなどを獲得したのでしょうか。

どんだけものぐさだったんだ、と思ってしまいました。

須田はレベルが上がった。

賢さが1あがり、『自分のものぐささが昔からの事実だった』ことを知った。

しかし、20の精神的ダメージを受けた。

## （母の）夏の思い出

夏休みなのだから、夏休みの話を。

夏休みは楽しい長期休暇と言う面があるが、宿題地獄と言う面も存在する。

怠惰な上に学校で聞いた事はおおよそ一回で覚えてしまう。勉強に特化した頭を持っていた私には、宿題をやる意味を理解できない所があった。一種のセンスでどうにかできる数学を好み、反復が必要な語学を嫌う。幼いころの私は確かに、典型的な理系だった。

そんな私がこの宿題地獄に対して中学の頃に取った行動は一切やらないで登校と言う物だった。

親の関係や、ただでさえ登校拒否で学校に引つ張り出すのが難しい私を、担任は責めなかった。しかし、それなりに心苦しくはあったが、私はこう言い切った。

「宿題をやらなかったんじゃない。答えが分からなかっただけですよ」

全部白紙なのにいけしゃあしゃあとよく言っただと思う。私の図太さはこの頃から目立ち始めた。

当然ながら、実際の所は問題文など読んじやいない。

そんな私をこの頃の両親は諦めたような目で見ていた。何せすぐ上の姉も登校拒否の挙句、高校を中退した所だった為だ。

代わりに、両親とは登校拒否の間にはよく話をした。

ふらふらと外に出歩くような事はしない臆病ものだった。その上、休んでいる事にしつかりと罪悪感を持っていた私は、休んでいる間も自習をしていた。

三時ごろには母と一緒に居間でおやつだった。その時だけは会話が弾む。

「そついや、母ちゃんが子どもの頃も夏休みの工作とかあったんだよね。何作ったの？」

軽い興味で私はそれを問うた。そしてニコニコと母は語りだす。

「切り絵を作ったなあ」

「切り絵？ また手間がかかりそうなもんだね」

「ただの切り絵じゃない。チョウチヨの切り絵だ」

「は？」

「たくさんのチョウチヨを捕まえたなあ」

母は目をキラキラさせながら思い出すように中空を見る。

私は、正直理解したくなって乾いた声で「はあ」としか相槌が打てない。

「それで捕まえたチョウチヨの羽をハサミで切つてな。画用紙に羽をセロハンテープで貼り付けたんだ。それで山の絵を作った」

「……どのぐらいのチョウチヨを使ったの？」

「うーん、五十匹ぐらいだったかなあ？」

「あの、聞きたいような、聞きたくないような感じだけど……本体は？」

「羽を取っちゃうと死んじゃうぞ」

切ない真実である。

「それで、まさかそれを学校に……」

「持って行つたんだっけが、気持ち悪いって言われてなあ。綺麗なのに」

「そりゃ気持ち悪いって言われるだろうね」

戦後の食糧難に育つた母は、とてもたくましい人です。

「須田はレベルが上がらなかった。母の知らない情報を手に入れた。」



## カレーなる調理実習

家の常識は、社会の常識とは限らない。

小学校五年生。調理実習で作る事になったのは、おおその子どもたちの好物であるカレーだった。

班ごとにカレーとご飯を作り、昼食にはそれらを食べる。その計画の主導権は、当然のように女の子が握っていた。

男子1に対し、女子2・5と、女子の多いクラスだった私は、男子が一人きりの班だった。

そして、小学校高学年の頃の女の子というのは大変ませており、下手な男子よりも強いなんて事はざらだ。そして、女だてらにガキ大将をしていたようちゃんと、私は同じ班だった。

小学校低学年の頃こそ無茶な命令をされたり、石を投げられたりとなかなか過激だったようちゃんだったが、この頃には丸くなっていた。

そしてそのようちゃんが下す命令により、私はルー調達係となっていた。

「でも、辛さはどうする？」

重要な問題である。これが違くと味がさっぱり変わってしまうし。他者の好みなどさっぱりわかっていない私はとりあえず聞いてみる。

「ウチは甘口だよ」

しょうこちゃんが言う。

「私の家は中辛だけど」

一応自分の言い分も言っておく。そうやって意見を出し合うと、中辛と言ったのは私と男子の朝田だけだった。

そしてうなっていたようちゃんは思いついたように提案する。

「甘口と中辛を混ぜよう！」

そうして、購入するルーの味は決まった。

「母ちゃん。今日は買い物に連れてって」

私は家に帰ってからスーパーに夕食の材料を買いに行こうとした母を捕まえる。

「調理実習で作るカレーのルーを買ってこなきゃいけないの」

訴えると、母は「ああ」と納得して私をひきつれて買い物に向かう。行先は近所のスーパー。店長を同じクラスの小谷の親がやっている店である。



そして、私は『いつも通りのルーを購入』してしまっただ。

調理実習の当日、料理が得意とは言えない私は片付けと調理器具の用意の係を勝手にやっていた。

そして、最後の仕上げのルーの出番となった時に、それは起こった。

「え……」

ルーを見たようちゃんが凍りつく。それを見た他のメンバーも私の買ってきたルーに固まっていた。

その様子に、どうやら何かしでかしてしまったらしいと空気だけで察知した私は、冷汗だらだらな状態で首を傾げた。

「中辛と甘口……だったよね？」

そのルーのパッケージにはきっちり中辛と甘口の文字がおどっている。しかし、彼女達の問題はそこではなかった。

「な、何で、バーモ トじゃないのぉー!!」

私が買ったのはジャ カレーだった。

「ご、ゴー デンカレーよりはこっちかなって……」

必死の弁明だが、おそらくゴールデンカレーの辛さに付いてこれる小学生はいない。

バーントカレーの辛さが1ならば、ヤワカレーの辛さは4ぐらいになる。大人でも辛い物が苦手な人には絶対に食べられない辛さである。

しかし、辛い物好きの叔父と同居しているため、我が家のカレーは友人一同の家で出されるカレーとは一線を画していた。

「『けいちゃん、最悪!!』」

異口同音に女の子メンバーから罵倒され、気の弱かった私は目をウルウルさせながら謝罪していた。

完成したカレーは、当然ながら他の女の子達には食べられず。彼女達は他の班のカレーを分けてもらう事でしのいでいた。

そして私は自分で自分の班のカレーをむしゃむしゃと食べる。

いつも通り、おいしいカレーだった。

ちなみに、このカレーで救われた面々も実はいた。

「『須田、最高!!』」

異口同音に称賛する男子達。甘々カレーにうんざりしていた彼ら

にとって、私の選んだルーは理想だったらしい。

須田はレベルが上がった。

賢さが1あがり、常識を一つ知った。  
トラウマが増えた。

## 酔っ払いラブソデー

お酒は二十歳になってから飲みましょう。

その日、姉ははりきっていた。

「本格、ウナギのかば焼きを作るぞ〜！」

「どんどん素敵〜！」

後ろで姉をあおる私。姉曰く、「本当にお前は agitator  
(煽り屋)だよ」。

「本格かば焼きでは、ウナギの臭みを取る為に料理酒につけますが、父ちゃんの酒を少しでも消費するために焼酎でGo！」

ノリノリな姉は焼酎にウナギ様をどっぷりと付けた上でジュージューと焼いていました。

そしてそれを家族で食す。

「おいしい」

率直な感想を述べる私。

「高いウナギ使っただけあるねえ」

材料を購入してきた母も満足。

「えっへん。わたしの腕だよん」

鼻を伸ばす姉。

「まあまあだな」

冗談混じりな評価を下す父。まあ、他の兄弟はこの頃家を出て言っているのではないわけですが、そんな感じで完食しました。

が、これは姉の仕掛けた罠だった。

いつも通りPCを立ち上げてチャットを開始する私。小説を書き始めて一年ほど経ち、学校の事を忘れて楽しんでおりました。

熱中し始めて三十分程すると、PCのある部屋の隣の部屋に客人が来ている事に気づく。こっそり覗くと、姉と姉の彼氏である堀田氏。

「おりよ？　いらっしやい」

「邪魔してます」

ぺこりとお互いに会釈しながら、冬の寒さに負けて二人の炬燵こたつに

混ざる。果てしないお邪魔虫である。

「寒いね」

「どんちゃん、顔真っ赤だよ。大丈夫か？」

「隣の部屋、尋常じゃない寒さだからね」

冬は外よりも寒く、夏は外よりも暑い欠陥住宅的な部屋が、PC部屋である。

そう、この時私たちは、隣の部屋の寒さにより私の顔が赤くなっているのだと思っていた。

そうやってひとしきり暖まってから、私はPC部屋に戻ってチャットを再開する。

そのチャットの仲間全員に言える事だが、チャットでの会話は異常に高テンションで進行していた、毎回。その中で、比較的年齢の上の方だった私は基本的にストッパー役。常軌を逸して他者を傷つけ始めた場合に「そのぐらいにしときなよ」と水を差す役である。

まあ、その常軌を逸したやり取りが客観的に見て面白いから、常連と化していたのだが。

『それじゃ、寒さに耐えきれなくなってきたから落ちるね。』

『乙』の文字が大量に流れるのを確認し、私は退出ボタンを押す。そして、PCの電源を切ると、私は姉達のいる部屋の炬燵に滑り込む。

「寒い！」

「そりゃねえ」

苦笑しつつ、堀田氏が少しずれてくれた。プルプルと小動物のようによつて、私は炬燵に限界まで入る。

「そういや、どんちゃんは最近エニアグラムにはまってるんだよねえ」

姉の言葉に、私の耳はぴくぴくする。

エニアグラムとは、円を九等分した上で作成される特殊な図形の事を本来指す。しかし、私のはまっているエニアグラムは性格診断に使われるものだ。

大きく分けて九タイプ、細かく分けて二十七タイプに分類し、人間関係等の性格が影響する問題を解決するための研究。

この中でも竜頭万里子さんの『究極のエニアグラム』にはまっていた。

そして、私は……二十分近くエニアグラムについて二人に語っていた。その間、二人には一切しゃべらせずに。

迷惑極まりない私に、やがて異変は起こった。

「うつ……」

「ど、どうしたどんちゃん！ 真っ青だよ！」

「頭痛い……気持ち悪い……」

吐き気と鈍器で殴られたような頭痛。姉の目が生ぬるくなった。

「どんちゃん、まさか……酔っぱらった？」

「そんな、私は酒なんか飲んで……うなぎ？」

「うなぎっぱいね」

「うなぎで酔わないよ、普通」

堀田氏が常識的なツツコミをいれるものの、私は依然として吐き気と戦っている状態。そこで、どうしようもない結論を姉が出す。

「どんちゃん……」

尋常じゃないほど、下戸だね」

以後、私はやはり臭み消しに焼酎に付けたエビフライに酔い、ブランドケーキに酔い、高級な漬物で酔っぱらった。

高校の頃の切ない思い出である。



須田はレベルがあがった。  
体力が1あがった。  
下戸の技能が発覚した。

## 酔っ払いラプソディー（後書き）

作中のエニアグラムについては下記のサイトを参照。

情報量がすごいのでご注意ください。

『究極のエニアグラム』

<http://www.mirai.ne.jp/ryutou-m/>

すごいおじさんとすごいわたし（前書き）

久方ぶりの投稿ですが、相変わらず酷いお話です。  
お付き合い頂ければこれ幸い。

すごいおじさんとすごいわたし

我が家には、すごい叔父がいる。

私の叔父は鍼灸師である。まあ、針やお灸、マッサージで慢性的な病気をどうにかする職業ですね。

その治療院は我が家とつながっており、廊下のガラス戸をがらがらと開けると治療院になっている。ちなみに、治療院にはトイレは無いので、トイレに向かうお客さんと顔が合うとかはよくある。

そんな『先生』と呼ばれるような立場の叔父の何がすごいかというと……強面こわもてなのだ。そりやもう、「ヤクザですか？」と聞きたくなるような。

その強面のせいで、いくつかの伝説を持っている。

幼稚園の学芸会では金太郎を倒すようなクマだった。日光にバイクで行き、おみやげ物の木刀を背負って走っていたら、集会に向かう暴走族と間違えられて警察に止められた。お灸で使うもぐさ（原料はよもぎ。無害）を仕入れてバイクを走らせていたら、大麻の運び屋と間違えられて警察に止められた。暴走族の若いお兄ちゃんがうるさかったので、表に怒鳴りにいったら本物と間違えられて平謝りされた。

このぐらい、強面なのだ。

恰幅がよく、マッサージもやる関係で体力もあり、柔道をやつてたせいで腕っぷしも強い。どうやると相手が痛がるか、なんて職業柄当然のようにわかつている叔父は、その強面もあつて私や兄弟達にそりやもう恐れられていた。

兄弟だけではない。我が家に遊びに来て怒られた友人達からも「けいちゃんのおじさんは怖い」と幼稚園生や小学生の頃はよく言われていた。

なぜそんなに怒られるか。それは先述した我が家と治療院の関係にある。

我が家は二階建てで、二回にある一部の部屋は……治療院の真上に存在するのだ。そして、そこでちびっ子が鬼ごっこでも始めようものならば……

「うるせえええつ!!」

と叔父に怒鳴られ、追いかけて回される。そしてあえなくちびっ子は捕まり、げんこつによる制裁が加えられるのだ。相手がこの子供だらうと関係なく。

ちなみに、次兄は線香で根性焼きをされていた。

そんな恐怖の叔父も、正月にはちゃんとお年玉をくれる。そして、幼稚園生の私にこう聞いた。

「お前、百円玉十枚とこのお札五枚どっちがいい」

そう言つて叔父が出しているのは千円札である。

千円札の価値を全くわかっていなかった私は元気に答えた。

「百円玉十枚!!」

「……やつすいなあ、お前」

叔父の言っている意味も分からず私は百円玉十枚をもらってはしゃいでいた。

こんな感じで、叔父は甥・姪で遊ぶことが多かった。そんな叔父への逆襲は、叔父にとってはかなり想定外のところからだったらしい。

ある日、私は叔父からこう頼まれた。

「ちょっと出かけてくるから、留守番してろ。電話が鳴ったらちゃんと出るんだぞ」

「うん」

「電話一回につき百円やる」

「わーい!!」

無邪気に喜んで、私は店の電話番号をした。

この頃、留守番電話なんて高等な物がなかったための処置である。  
ちなみに、我が家の電話は黒電話だった。

そうして二時間ぐらいたった頃、叔父が帰ってきた。

「どうだった？」

「間違い電話だった」

「そうか」

「ん」

にこにこ笑いながら私は手を出す。

「電話一回で百円」

「……」

須田はレベルがあがった。

賢さが2あがった。

百円を手に入れた。

おじからの信頼が5さがった。

## 高校受験の思い出（前書き）

ポレポレの中で比較すると暗いお話です。受験中の方は見ない方が良いでしょう。



## 高校受験の思い出

人生の中で大きな挫折という物は、余程の幸運がない限り『全く無い』などありえない。

それが本当に幸運なのか、と言うのはわからないけれど。

比較的幸福な子供時代を過ごした私は、中学で壁にぶち当たったぶん、アイツは私を軽くからかったただけだったのだ。それに対して、私は反論したくなり、けれど本能的に口を閉ざした。

当時を振り返れば、アレは思考の暴走だったのだと思う。最初に強い感情が生まれ、それを言葉や態度にあらわすため思考が、同時に無数に生まれる。

結果、私はどうなるかと言えば、無表情で何も言わず、何も反応できなかった。

（私の作品でキレると無表情になるキャラクターが多いのはこんな経験からだったり……）

パソコンに例えるなら、処理を多く実行しすぎてオーバーフローし、フリーズした状態だった。

この状態から先に進むと恐慌状態に陥るのだが、私はそれが不安で仕方なかった。恐慌状態になった私を友人としてつき合っていた

人々が避けるようになるのではないか。私は、その恐怖に耐えられず、学校に行けなくなった。

当然ながら、オーバーフロー状態の私はそれをうまく説明できず、ひたすら体調不良を理由に休んでいた。

休むことは両親から許された物の、私の中でできあがりつつあった私の基準は、自分をダメな人間と判定するようになっていた。周囲が大丈夫だと言っても、私は私が大丈夫じゃないと判断する。自分の完璧主義な側面が見事にマイナスに働き、よけいに私は自己評価を下げる結果になった。

そんな、コンプレックスの塊になっていた私も、受験という岐路に立たされた。

ダメダメな私にも、うつすらとした夢がある。まあ、夢と言っほどはつきりしたものでは実はないのだが。

自分自身を省みて、私は『技術職しかない』と思うようになっていたのだ。サービス業ができるほど愛想が良くはなく、第一次産業ができるほど体力がない。そのため、私は『製造業か情報系、伝統工芸の路線しかない』と考え、志望する高校は一つに絞れていた。

選ぼうと考えていた科は二つ。一つは倍率が高い情報系。一つは倍率はそれほどではないが、女性が確実にいないだろう電気系。

私は、情報系の科の受験をした。

休みまくっていた私は当然のように推薦を受けられず、一般受験で勝負することになった。

当然担任の石上先生は必死に反対したが、『不合格になったら滑り止めで受験するバカ高校に入る』と言い切って受験した。石上先生は半泣きだったので、ちょっと申し訳なくも思った。

休み続けていたしつぺ返しとしての不得意な勉強を、自習でどうにかしようと努力する。学校の教師に助けを求めるのも、家の人間に助けを求めるのも嫌だった。自分の力だけで受験し、落ちても後悔するものと心に決めていた。

私と同じ科に受験する子はあと二人いて、違うクラスではあったが私たちはそれなりに仲良くなった。

受験日には私は一人で行動していたが、受験発表では同じ中学の人間が固まって高校に行くことになった。

落ちても仕方ないと思つての受験は、筆記の点数は三人の中で一番良かった。けれど、内申の点数は確実に三人の中で一番下だ。

私は落ちる覚悟でもつて自分の番号を探した。

私の番号は、無かった。

やっぱり。

諦観とともに自分の番号を見た。

二人とも合格したのだろう。

そう思つてよく見ると、見覚えのある番号は一つだけだった。

一緒に受けた西田さんも落ちていた。

一人合格してしまった本村さんが、微妙な顔で硬直している。さすがに本村さんがかわいそうだった。

そして、まあ、涙をためてプルプルし始めたあたりで予想はしていたが、西田さんが号泣しだした。

「ああ……つらかったね。よしよし」

困りながらも西田さんを慰める。そして本村さんに小声で「何とかしとくよ」と苦笑した。

本村さんは『ごめん』とジェスチャーして、他の友人の所へ駆けていく。

当然ながら、大泣きする西田さんは非常に目立った。

「大丈夫？」

声をかけてきたのは小学校の同級生であり、西田さんの親友でもある鈴ちゃんだった。顔見知りと言うことで私も遠慮はしない。

「大丈夫じゃないよ」

苦笑しながら西田さんを鈴ちゃんに引き渡す。

「そうかそうか、落ちちゃったか」

「うえええええええ」

鈴ちゃんは西田さんの頭をなでてあやす。鈴ちゃんと一緒にいた他の西田さんの友人たちも彼女を慰める。

そしてふと、同じく小学校の同級生である理絵ちゃんが私の存在に気づいた。

「須田は受かったの？」

「ううん」

首を振りながらあまりにもあつさり回答したため、空気が凍った。ちと失敗したらしい。

「「「えええええええ！？」」「」」

「予想はしてたから、西田さんほど衝撃はないんだよ」

「そ、そうか」

微妙に言いづらそうに理絵ちゃんが私に言う。だから、私はそこにつけこんだ。

「じゃ、悪いけど西田さんをよろしく」

「うん」

私は西田さんを預け、近くにいる学年主任に話しかける。

「先生」

「どうだった？」

「私と西田さんは落ちましたけど、本村さんは合格しましたよ」

いつもと同じ調子で話すと、先生の表情が落ち込んだ風になるのが分かった。

「そうか」

「この後は学校で石上先生に報告すれば良いですかね」

「そうだな。気をつけて帰れよ」

「はい」

先生に礼をして私は立ち去る。

普段よりも速い足取り。

誰かに合わせる必要はない。だって私一人で歩いているのだから。合格した子達と一緒にいるのが申し訳なくて、私は早歩きで駅に向かう。この調子で歩けば、他の子達が乗るだろう電車よりも一本早い電車に乗れる。しかし、駅に着いてからちよつとした誤算があ

った。

駅についてすぐに出発する電車に乗れる状態にはなった。けれど、他の高校の合格発表から帰ってきていた子達と合流する結果となっていた。

「須田ちゃん！」

笑いながら同じクラスの石崎さんが手を振る。きっと合格したのだろう。

「合格？ おめでとう！」

努めて明るく彼女を祝う。すると他の子達もやってきて、口々に感想を言い合う。それに曖昧にあいうちをしていた。そして一人が、私にあの質問をしてしまう。

「須田ちゃんは合格したんでしょ？」

今度は少し間をおいてから首を振る。

「落ちたよ」

苦笑しながらそう告げると、皆驚いていた。

「普通落ちたら大泣きするもんじゃないの！？」

勝手に決めるな、と内心で思いつつも、「予想できてたからね」と濁す。

「落ちてる人間が混ざってると喜びづらいでしょ。私は早めに帰っ

てるね」

言いながら早々に駅の構内に入ってしまう。

まるで他人を気遣って距離をとっているかのよう。

けれど、違うのだ。

他人に気を使う余裕がないから、早々に離れたいだけ。

皆が喜びにくいから、とかは都合の良い理由だ。

本当は皆がいて私が泣けないだけなのだ。

やってきた電車に私は一人乗る。乗りやすい入り口近くの車両ではなく、端っこの車両に。誰も来ないように。

まだまだ日は高く、いつそ眩しければ誰も私を気にしないだろうに。

思いながら、私は目元をハンカチで覆って、嗚咽をこらえて泣いた。

努力したのだ。  
頑張ったのだ。

少しだけ、希望を見てしまったのだ。



けれど、落ちたから ダメだったから、覚悟する。

この電車を降りたら、泣かない。

家族にも、担任にも笑顔で言っ<sub>て</sub>やる。

「落ちました」

「そうか……」

石上先生は落ち込んだ雰囲気<sub>で</sub>私に言う。

「その……大丈夫か？」

「はい。予想はできてましたので。×高に決まったただけですし」

滑り止めの高校に行くことが決まったただけだ。あそこも『仮合格』だが仕方ない。

「それじゃ、失礼します」

私はすたすたと家に帰る。家で報告をすると、家族にはいつも通り笑い飛ばされた。

そして、このお話にもちゃんと落ちを付けてくれるのが私の周囲である。

「継<sup>けい</sup>ちゃん、聞いた？」

小学校からの付き合いである陽子<sup>やうこ</sup>ちゃんが休み時間に話しかけてくる。

「何を？」

「三組は全員合格したらしいじゃん。一組<sup>いちぐみ</sup>は十人近く落ちたらしいよ」

「げ」

四十人クラスで十人落ちと言うことで、この合格率の低さもわかっていただけたと思う。公立高校の受験でこの合格率は田舎的にはあり得ない。

その合格率の引き下げに一役買っている私としては、ぜんぜん笑えない。

「だからさ、石上ティーチャー最後の方になると泣いてたらしいよ」

その時、私は思った。

落ちるとわかっていて受験して、石上先生ごめんなさい。

私は一生、石上先生には頭が上がらない。

須田はレベルが上がった。  
賢さが3上がった。  
覚悟を手に入れた。

類は友どころかドッペルゲンガーを呼んだ

彼女は、私のとつての【運命】だったのかもしれない。

別にカミングアウトではないが、それはそれは鮮烈な始まりだった。

高校受験を見事に失敗し、あげく『仮合格』と言う謎すぎる状態で私の高校生活は幕を開けた。

どういう状態か簡単に言うならば

【成績は問題なくても素行的に問題児だから、一年間様子を見るね】

と言うことである。

私立なだけあってなかなかえげつない。

そう、私の住んでいる地域では、公立高校よりも私立高校の地位

が低いという謎の状態になっている。貧乏人が多いためか私立高校に進む子供は少なく、当然ながら資質的に優れた子供は公立高校に進む。結果、私の入学した私立高校は、立派なバカ高校だった。

故に、戦々恐々とする部分があった。明らかに、生徒にヤンキーが多いのだから……。

実際入学してどうだったかと言えば、クラスの三分の一はヤンキー系列でした。

うん。予想通り。

しかし、意外に多かったのが……オタク系である。これもクラスの三分の一ほどを占めている。残る人々は比較的標準的なタイプだった。

当然ながら、私はオタク系である。

そんなこんなで中学とはつきあう人間がガラリと変わった環境で、私がまず近づいたのは同じ中学で今では親友でもあるちーちゃんである。ぶつちやけ、中学の頃は大した付き合いはなかったのだが、通学時に同じ時間帯に電車を待つ関係で仲良くなった。

その次は後ろの席に座っていた山岡さんである。中学で同じ部活の部員同士であった安井さんと彼女が友人同士だったのだ。その繋がりから話が弾み、やがてテストの際にはお互い利用し合うような協力関係になった。

テスト直前、彼女は覚えるためにテスト範囲をよく朗読した。それを私は聞きながら覚え、出そうな箇所や覚え方のコツを彼女に教える。そのおかげで、彼女と私の成績はいつでも近い場所にあった。

さて、問題の【運命】はたいそう目立つ存在だった。

他者を寄せ付けない空気。高みの見物をしている　そう印象づけさせるような視線だった。

そのせいもあってか、彼女の近くにいる人間はごくごくわずか。

彼女　長沢さんを見て、私は思ってしまったのだ。

何か、自分を見ているようだ。

それは可能性の話。

私が末っ子ではなく、長女に生まれて

私が親に期待されない子供ではなく、親の期待を一身に背負う子供で

私が学校の成績など大した問題ではないのだと教えられるのではなく、学校の成績が全てと教えられて

私が受験や登校拒否などの失敗をせず、全てが『親の予定通り』に進んでいたら

私は『彼女』になったのだろうと思った。他者とつきあう際に無駄にプライドの低い『私』ではなく、高いプライドと自信を持って戦う『彼女』に。

なぜかと言えば、私は彼女の感覚が手に取るようにわかってしまったからだ。

簡単な質問を投げかけられ、なぜ自分がこんなことを教えねばならないのだという不機嫌

簡単な問題も解けずに下の成績をさまよう級友に対しての嘲笑

簡単なことしか教えない教師への不満と侮蔑

彼女はそれほどこれらをあからさまには表に出していない。けれど、どうしても伝わってしまう。おそらく、彼女と私の感覚が近すぎるせいだろう。

そのせいもあって、ある時から私は彼女を観察していた。

結論としては、教師に対しての彼女はたいそうな猫かぶりである。成績をあげる上で教師への心証を上げるといふのは有効だという打算だろう。

そうして観察していたある日、移動教室で全員が別の教室へと向

かっていた。人が混沌とした状態になっていたその時に、普段席が遠い彼女の隣を私は歩くことになった。なので、私は思いきってこ  
う話しかけた。

「猫かぶつてるでしょ？」

彼女は綺麗な目を少し見開いて、そして細めた。

「よくわかったね」

正解だ、と彼女は笑う。

それがきっかけ。それが始まり。

そこから、私と彼女は時折一緒にいるようになった。私と彼女の  
間に誰か入れば、私と彼女はあうんの呼吸で相手をからかう。何せ、  
彼女の考えている事が私は手に取るようにわかるし、私が考えてい  
る事も彼女はよくわかっていて。特に打ち合わせもせず、同時に  
同じ事ができる。一卵性双生児のような感覚だ。赤の他人にも関わ  
らず。

彼女は「周りにはバカばかりだった」とよくもらした。「だけど  
須田は頭が悪くない」と。けれど、本当は違っていると私は思っている。  
頭が悪いが悪くないかじゃない。私が彼女を理解できるのは、鏡の



ように彼女と私がよく似ているから。いくら賢くても、彼女を理解できない人間は本当はたくさんいる。

そして、それは私にも返ってくるものだ。いくら賢くても、私を理解できるかどうかはそこでは測れない。

私も彼女も、当時は理解者を欲していた。だから、お互いのいる場所はちよつとだけ居心地がよく、けれど居心地が悪い。鏡のようだからこそ、つらいこともある。

そんな私たちは二年の時に別々のクラスになり、いっさい口をきかなくなつた。それはとてもあつさりど。

そして、三年の時にもう一度同じクラスになると、今度は一年の時のように仲良くなる。

「二年の時は全然話さなかつたね」

ある時そんな話を彼女にふつた。すると彼女の返答はこうだった。

「必要なかつたから」

気持ちは非常によくわかるので、私は笑つた。

けれど、本当は少し寂しかったよ。

あの時言えなかった言葉を、ここに記す。

まあ、そんな彼女との初めてのあつれき軋轢は一年の時の中間テスト発表時だった。

「成績の方の推薦を取った私が二位というのはおかしいとは思っただけだね」

私の隣で冷え冷えとした視線を長沢さんが送る。そりゃもう、居心地が悪くて私は思わず硬直する。

順位表にある長沢さんの名前の右隣 一位の欄には私の名前。  
実は、自分が一位だと言うことは面談で担任から知らされていたが、言わなきゃばれないと高をくくっていた。玄関に張り出されるという事を知らずに……。

かくして、『仮合格』と言う正式に合格していない人間が中間テストでトップを取ってしまうという珍事は幕を閉じる。

この後も、中間テストでは長沢さんから冷たい視線を私は送られ続けた。しかし、体育を含む実技ではボロボロだったため、期末テストで一位を取ることは決してなかった。

覚悟して挑んだ高校受験は、思いのほか私に力を与え、大切な経験として私を育む飼料となる。

そう、高校時代は私にとって、この後に控える冬を乗り越えるた

めの秋の季節となるのだ。（もしやもしや）

ちなみにその冬とは、さらに続く受験という名の冬である。

須田はレベルが上がった。  
賢さが1上がった。

友人を複数手に入れた。  
ちよっぴりやすらいだ。

人が倒れる所に遭遇するとパニック起こすよね

人生の中で、想定外のトラブルというのは確実にあるもので。

高校の頃の話だ。

パソコン部と言う名のワープロ部に入った私は、親友ちーちゃんと放課後はよく行動を共にした。同じ部活で同じ中学出身、そして何より趣味が似通っていた私たちは、部活では喋りまくりで文章を打ちまくる。

ブラインドタッチを早々に覚えてしまった関係で、部活動中に私たちがやる事は少なく、結果顧問とよく三人でしゃべっていた。

その日は、何人かの生徒と教師が献血をしていた。私は体力に不安があつたため献血を拒否している。

そして、この献血でちょっとしたトラブルが部活動中に発生したのだ。

いつものように、準備室で顧問とちーちゃんと私はだべっていた。

「テトリスとかあるなら、生徒用パソコンの方に入れてくれりゃ良いのに」

「勉強しないだろうが」

愚痴っぽく言った言葉に先生がつっこみを入れる。そんなやり取りをしていたからこそ、私たちは完全に油断していた。

正直、何を話していたのかは覚えていない。

ただ、ある瞬間から先生が反応しなくなったのだ。

そして椅子に座ったまま、天井を首だけで見上げるようにがっくりと頭が後ろに動いたのだ。

おふざけでやっている気絶したフリだろう　私もそう思ったのだから、ちーちゃんがそう思ったことは仕方なかった。

「んもう！　先生なにやってんの！」

ちーちゃんが先生の肩を強めにたたく。いつものことだ。それで先生が痛がるのもいつものこと　だったのに、先生はあろう事か

泡を吹いた。

うん。気絶して泡を吹くと、人間でも力二の吐く泡みたいになるんですね。『てんかん』かよ。

あたりにちーちゃんの悲鳴が響きわたった。私は声を出さなかったが、これは冷静だったのではなく、パニックから声が出なかっただけである。

「どうしたの!？」

ちーちゃんの悲鳴に部長が駆けつける。

「せ、先生が泡吹いて　！」

パニックになりながらちーちゃんは説明する。涙目だ。

さすがに泡を吹いてしまった時の対処など高校生が知るはずもなく、私は瞬時に部屋から出た。

「養護の先生呼んでくる！」

そう言って私は走った。

保健室が北棟の一階で、パソコンルームが南棟の四階というのは何の因果か。

かなり遠いが、専門家を呼ぶのがベターだ。

何か、後ろで騒いでいたような気がしたが、私はパソコンルームを後にする。今思えば、一番楽な仕事を奪ったような気がしなくもない。

しかし、予想外に助けは近場にいた。三階に降りたところでクラス担任に出くわしたのだ。

「先生！」

私の焦り方に驚いている風なクラス担任だったが、私は可能な限り冷静に状況を伝える。

「鈴木先生が倒れたんです」

「え！？」

「意識がなくて、泡吹いています。パソコンルームにいます」

「わかった」

「私は今から青木先生（養護教諭）を呼んできます」

伝えるだけ伝えて、私は再び走り出す。喘息持ちなのがたたって苦しいが、緊急事態につきあえてそこから目をそらす。

保健室にたどり着いた私は青木先生を見つける。

「先生！」

「何？」

「鈴木先生が倒れたんです！ 意識がなくて、泡まで吹いちゃって

……」

報告した時に、青木先生は『ああ、やっちゃったな』的な生ぬるい表情をしていた。

「貧血かなあ」

青木先生のつぶやきに、私は『ああ、なるほど』みたいになってしまった。

おそらく、鈴木先生は比較的無茶な献血を行ってしまったのだろう。そして、献血した日は安静にしているのが普通なのに、ゲームの話で盛り上がった関係で血圧上昇　気絶ってことですかい。

その後、鈴木先生は普通に意識を取り戻し、次の日は普通に元気だった。

俺達の寿命を返せ。

須田はレベルが上がった。

体力が1上がった。

冷静さが1上がった。

寿命が縮んだ。



人が倒れる所に遭遇するとパニック起こすよね（後書き）

追記

ちーちゃんの話では、最終的に先生は痙攣<sup>けいれん</sup>まで起こして大変だったらしい。救助要請に走つたという良かった……。

## おばあちゃんは心配性

ご老体にとって、一番下の孫というのは可愛くて仕方のない物らしい。

私が中学生の頃まで、我が家はかなりの人数の家族になっていた。父・母・兄二人に姉一人・叔父・そして祖母。祖父は私が生まれる前に亡くなっていたが、ざっと八人家族である。これだけ大人数だと大変にぎやかな家庭であった。

そして、祖母は私と次兄をたいそう可愛がった。二人とも食が細いため、自分の分の食べ物を与えようとしていたりしていた。それを目ざとく見つける食いしん坊な姉がかつさらい、姉はよく怒られていたが気にしていなかった。

そんな祖母は心配性で、次兄が夕方になっても帰ってこないと家の前で待っていた。そして帰ってきた次兄に「恥ずかしい！」と怒られる。

この心配性っぷりは当然私にも適用され、放課後まで残って作業

をしていると、祖母が校門のところまで迎えに来ていた。そうなる  
と、友人達と帰るわけにも行かないので祖母と一緒に帰ってくる。  
二宮金治郎と一緒に待っている姿は友人達の中ではちょっと有名に  
なっていた。

そんな日々が日常になったある日、校外学習の関係でレクリエー  
ション係になった私は六時頃まで学校に残っていた。

仕事が終わらなければ帰れない、と言うことで私以外にも残って  
いたし、先生も残っていた。

「これで良いかなあ？」

「うーん。でもさあ」

そんなやり取りを五人程度で図書室でやっていた所で、校内放送  
がいきなりピンポンパンと鳴った。

『五年生の須田継さん。おばあさんが迎えに来ています。至急職員  
用玄関に来てください』

ピンポンパンと鳴ったものの、図書室には静寂が降りた。  
何か、明らかに私が呼ばれた。

「須田さん、行って」

先生が言うので、私は「はい」と頷いて職員室へ駆け降りる。図  
書室が三階なのが嫌味だ。

そしてついた先には、老人用の手押し車に掴まって立っている祖  
母だった。

「ばあちゃん……」

軽く頭を抱えて祖母の所へいく。

「はよ帰んべえ」

そう急かす祖母に困りながら、私は祖母の耳元で話す。耳が遠い祖母は、こうして話さないと聞こえないのだ。

「ちょっと用事があるから先に帰ってて。大丈夫だから」

「何言つてんだ。帰んべえ」

祖母、別な意味で聞いていない。すると先生が私に声をかけた。

「須田さん、どうして帰れないの？」

「係の仕事が終わってません」

正直にそう言うと、先生はあっさりところ返してきた。

「帰りなさい」

「は？」

意味がわからなくて首を傾げる。大体、私以外にも残っている人はいるのに、私だけ帰すとはどう言うこと？

「良いから帰りなさい」

「でも……」

「良いから」

強く言われて、私は渋々三階へと戻る。

「すみません、帰るように言われてしまったんですが……」

申し訳なく思いながら報告すると、係の担当の先生は連絡を受けていたらしくあっさり私を帰してくれた。

今思えば、保護者とのトラブルを避けるための対応だったのだろうと思う。しかし、私の子供時代は保護者が学校にクレームを入れる方が珍しかったため私は居心地が悪い状態で帰ることとなった。

それ以降、私が残った作業をしていると、先生方は私を夕方になる前に返すために四苦八苦するのであった。

高校生になってから母から聞いた話だが、私には叔母がいたらしい。

父の妹である叔母はまだ赤ん坊だったのだが、祖母と一緒に布団に入っていてそのまま死んでいたらしい。祖母のぬくもりで、死んでいても冷たくなっておらず、気付いた時には完全に手遅れだったのだそうだ。

祖母は酷く落ち込み、嘆き続けたらしい。しかし、そんな祖母にまだ小学生ですらなかった父は「いなくなったもんは仕方ねえだろ」

とさとしたという。何とも父らしい。

それから祖母は吹っ切れたらしい。

そんな話を聞いたら、祖母は私を死んだ叔母と重ねていたのかも  
しれないと思った。

幼少の私はかなり痩せており、風が吹けば飛ばされるような弱々  
しい外見だった。ふつと消えてしまいそうなほど気配も希薄な私は、  
祖母から見て死んでしまった叔母を想起させるほど心配になったの  
ではないか。

「ずいぶん心配かけたんだから、お前も一緒に棺に入ってやれよ」

祖母が死んだ時の叔父の冗談。すかさず私はこう返す。

「違うね。一番心配を掛けたのは私じゃないもん。兄ちゃん、一緒  
に入ってやれ」

「何で俺が！」

基本、我が家の会話は80%以上の冗談で構成されている。

須田はレベルが上がった。  
賢さが1上がった。

## 珍妙な下宿人（？）

彼は気付けば我が家の家族であつた。

高校の頃である。

姉はニートな感じでまったりしていたそんな時期、寒い冬は二人でコタツに入つてぬくぬくする事もままある。

これよりしばらく、音声のみでお届けします。

ある日の昼頃。

「寒いねえ、姉ちゃん」

「寒いねえ、けいちゃん」

「こんなに寒いとコタツから動けないねえ」

「コタツの下より《にゃー》と相づち。

「「……」」

またある日の事。

「夜はもつと冷えるねえ、姉ちゃん」

「そうだねえ、けいちゃん」

二階の屋根より

ドタバタドタバタ《にゃー！！ みぎゃー！！ みゃー！！！！》  
「うるさあああい！！」と母の声。

端的に申しますと、我が家に猫が住み着きました。

最初は子ニャンコだったソイツは、餌を求めて生ゴミをあさったり、昼間にコタツの下に出没して人間の会話に割り込んだり、夜に大きなオス猫に追いかけて悲鳴を上げたりしていた。

とっても情けないそのオス猫の毛並みは真っ白だったため、母は勝手に「シロ」と安直に呼んだ。

しかし、それで納得する子供メンバーではない。私と姉はその真っ白なニャンコの名前を考えた。

「そうだ、真っ白でブニブニしているから『うどんこ』にしよう！」

当時はまっていた、ワンダフルワールド（漫画）の影響である。

そうして、ソイツは『うどんこ』と呼ばれるようになった。

うどんこは、喧嘩に非常に弱いオス猫だった。体が小さいせいも



あるだろうが、極端に臆病なのだ。

網戸ごしに人間がたたずんでうどんを観察する　この時点では警戒心ゼロでのんびりと昼寝をしている。なので、網戸を開けてみると……《フー。シャー！》威嚇する。人間への警戒心は無いようである、一応あるらしい。

だが、そんな警戒心が薄れてしまう瞬間が存在する。

餌を食べている時だ。

餌を食べる時、うどんこは《みゃうみゅうみょう》とよくわからない鳴き声を発しつつ食べる。あまり行儀が良くないのはノラなのでどうしようもない。

一心不乱に皿の生ゴミをむさぼるうどんこを見て、父はよしよしと頭を撫でていた。最初は。

そのよしよしは頭から首の辺りになり、そこから必殺ネコ掴み。食事中だったうどんこは、超不機嫌そうな顔になりつつも、ぶらーんと足の着かない状況のためなす術もなく、黙りこくって吊されていた。

そんなうどんこことの別れは、寿命でなかった。

ある日、うどんこはいつも通り母に餌をねだってまわりついていた。

そして、その日、母はゴミを出すために国道を横断していた。そ

れに普段は車が怖くて付いていかないうどんこがついてしまった。  
った。

母はうどんこが戻ってきているかとかは見ずに帰ってきた。

車が怖いうどんこは、帰ってこれなかった。

しかし、道の向こう側は魚を乾燥させたりして加工する工場が多く、餌に全く困らないうどんこはその後元気でやっていたりする。

さて、話は変わって私と姉は姉妹だけあって喧嘩もする。

「何だよ、お前肌がまっしろでまるでうどんこちゃんじゃないか！」

誉めているわけではなく、からかいからくる姉の発言に力チンときた私は

「姉ちゃんだってうどんこみたいにぶにぶにじゃないか！」

と応酬した。結果、こんな悪口になっていく。

「どんちゃん！」

「どんどん！」

これが現在、姉が私に呼びかける時の、そして私が姉に呼びかける時の呼び名となっている。

須田はレベルが上がった。

パラメーターは上がらなかった。

愛称（？）が増えた。

珍妙な下宿人（？）（後書き）

近頃、真つ白な猫をチラチラ見るのは、もしかして……。

転んでもタダでは起きあがらない（前書き）

今回も名前をすげ替えたノンフィクションでお送りします（笑）

転んでもタダでは起きあがらない

東日本大震災にて被災された方々にお見舞い申し上げます。

さて、今回は震災ネタですが、相変わらずゆるい話なのでご安心ください。ポレポレでは作者本人以外に深刻な話はほとんどありません。

東日本大震災とかなり大きくなりでの名前になった今回の地震。NHKは未だに東北関東大震災と言っているのがちょっと不思議ではありますが、ほとんどのメディアでは東日本大震災なので便宜上そう言うことにしましょう。

私が住んでいる場所も例に漏れず結構な揺れを感じました。

その時間、会社にいた私たちをまずおそったのが停電。プログラマなんてPCと仲良しな仕事柄、停電は仕事ができないことと直結します。普段であれば30分ぐらいすれば復旧するのに復旧しない会社のトップは行方不明。（まあ、いつも行方不明ですが）

困っていたところに早退していたNo.2の登場と、トップからの「帰れ」命令に全員で職場を離れたわけです。

しかし、No.2の岡崎のおばちゃん（会社のNo.2が女性って珍しいですが）が言うには、「停電で信号がダメになってるから、渋滞がすごいよ」とのこと。

帰り道に何個信号があるだろう、と憂鬱になりながら帰ってみる

と……町の境から家の側は何故か停電していない。

なんじゃこりゃ、と思いながら家に入ると、普通にニュースを見ながらいろいろ準備している家族。会社ではラジオすら聴けないと言っのに。

「飯だ！ 飯を今のうちに炊くんだ！」

一斗（十升）とか米を炊く母。四大家族なのに。いったいいつ食べ終わる計算でしょうか。途中で停電したら一斗の米とか結構つらいと思うんだ。

一方、父は居眠りしている。肝が太すぎる。

姉は実は現在ありえない職についている関係上、ぱにくっていた。あかせないので、強いて言うなら「役場関係」である。

「ど、どんちゃん！ おれ、役場いくべきかなあ？」

役場までは、車で40分以上の距離であり、現在家の前の道から向こう側は避難勧告がでている状況である。

「行けないだろう。隣町の信号がダウンしてるから、ルートの本庁もダウンしてるよ」

「そっか。そうすると、支庁にせめて行った方が良いかなあ？」

「うーん……あそこ、海に近くな？」

「うん……」

わりと酷い立地にある事をこつ言っ時に気づかされる。

「何言つてんだ、裏の公民館に人が集まってるはずだ、様子見に行くぞ！」

言いながら出発する母。たくましい。

そんなこんなで、三月十一日は徒歩による避難所巡りで幕を閉じた。

外出する時にブレーカーを落としたり、がんだ飯になった。（がんだ飯〓炊き方を失敗したご飯。方言）

そして十二日。どたばたと逃げ出した関係で酷い状態になっている会社を綺麗にしようと出社。会社役員である関口さんに帰り際に会った。

「須田さん、川口くんが岩手に出向してるって知ってる？」

出向というのは、簡単に言うなら得意先の会社においてその会社の人と同じように働く扱いである。

川口さんは二年ほど前から知り合い、話しかけ易かったのかよく私にメッセンジャーで話しかけるようになった男性である。あまりにもうざかったので禁止にして彼のメッセージを受け付けなくなったのは自分でも良い選択だったと思っている。この件ではツツコミ不要。

そんな彼が岩手に飛ばされたというのはちらちら話に聞いていたため、私は頷く。



「連絡取れたんですか？」

「それがさ、向こうの工場は高台にあるんだけど、地震の第一波で解散しちゃったらしいのよ。それでまっさきに町に降りちゃって…連絡が向こうの会社の人ともついてないらしいのよ」

要するに、行方不明って事である。

「親御さん達は……？」

彼に彼女がいないのは周知の事実なので、心配なのは親だけだろう。

「連絡が付いてないって」

「そ、そうですね……」

気分が落ち込みながら、その日私は帰宅した。

そして月曜日。事態はえらい落ちを迎えていた。

「川口さん、生きてたって！」

朝、岡崎さんの第一声である。

「良かったですね。連絡が付いたんですか？」

「いや、それがね……」

ここから話が長いので概略を。

土曜日の段階で行方不明が確定していた川口さん。どうにか川口さんを探したい一心だった社長だが、本人がでるわけにはいかない。そこへ、外注の東さんの所に川口さんから電話が……それを誤って切ってしまう東さん。しかし、川口さんから電話があったという事は、川口さんは生きている！

確信したNo.3である平野さんは東さんの車で新潟経由で岩手に向かう事になった。東さん、とばかりである。

そんな平野さんと東さんをバックアップするため、岡崎さんはテレビを注視し、社長はNHKに「連絡ください」の依頼。関口さんはツイッターで呟きまくり。と言った具合に総力を尽くして連携。

そして岩手についた二人は途中から歩きで川口さんを搜索。そして、川口さんの車を発見する。車の近くの避難所に平野さんが行っている時に、車の周辺をうろろしていた東さんに声をかける方が一人。

「川口さんの知り合いの方ですか？」

その方、川口さんの居場所を知っていた。

急いで二人はその人の言っていた避難所へ駆けつけ、川口さんを発見。大喜びしていたのだが、川口さんは開口一番にこう言った。

「何で二人がいるんですか？」

二人が怒ったのは言うまでもない。

そしてその日、家に帰るとコンクリートブロックが庭に積まれていた。

「どうしたの、あれ？」

「ああ、あれか？」

母は自慢げにこう言った。

「あれでカマドを作るんだ。これでガスや電気が止まっても食えるぞ！」

この人は本当にたくましく思うと思う。

須田はレベルが上がった。

体力が1上がった。

忍耐が2上がった。

川口さんへの好意が3下がった。

（最初から好意が0なのでマイナスになったわけですね！）

## 文系か理系かそれが問題だ

九九の九の段は覚えやすい。

いや、一の段が一番覚えやすいのは否定しないし、二の段も覚えやすい。けれど、九の段は付け加えて綺麗だと、小学生のころ思ったのだ。

9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
× 1	× 2	× 3	× 4	× 5	× 6	× 7	× 8	× 9	× 1
0									0
9	0	1	2	3	4	5	6	7	8

あえて十まで打ち込んだが、これで私が『綺麗』と言った事はわかってもらえるだろうか。

一の位は数が進んで行くごとに一ずつ減っていき、十の位は一ずつ増えていく。

大人になれば当たり前のこれは、暗記してしまうと気付かないものだ。気付いているのが当たり前だと思っていた須田は、高校のあた

りでこの『綺麗』だという感覚が当たり前ではない事によろしく  
付く。

そして『そんな自分は理系に違いない』と思っていたのだ。

「須田。お前の進路、情報系なのか？」

困ったように高校の進路担当の現代文担当教諭が言う。

現在、職員室にて進路確認されている私は頷いた。そも、私は情報系の別の高校を受験して落ちているのだ。そして、コンピュータ関係の勉強をしたいという熱は全く冷めていない。

しかし、進路担当が困る事情も一応わかっていた。

私はまたしても出席日数が足りなかったのだ。

欠席日数が多すぎたとも言つ。

三年になってクラス担任から「あ、須田推薦できない」と言われた時は正直絶望した。

かろうじて推薦できる専門学校は学費が高く、父が定年を迎えていたために「んな高い学校に行かせられるわけねえだろ」と両親に言われ、私の選択肢はとんでもなく狭かった。

そして、当然ながら『卒業したけど二トになりました』は学校の評判を落とすだけである。進路担当が何とかしたい気持ちは痛いほどわかる。

「んーでもなあ……」

困りながら進路担当が言った次の言葉に、私は凍りついた。

「お前、文系だろ？」

何故、そんなとんでもない勘違いが発生した。

全く理解不能。思わず私は押し黙る。

そして一つの仮説を思いたち、私はやっぱり固まった。

そういやこの現代文担当、一年の学年主任だから俺の成績把握してねえ。

この担当は三年間受け持っていた訳じゃなくて、三年生になってからの現代文担当だ。その一年間の現代文のテストで、一度だけテストでとつてはいけない点数 百点をたたき出した事がある。（零点が百点があるテスト問題は、問題として良い物とはされない。受験者の力量が図れていないから）

その成績だけ考えたら、確かに文系だと思われても仕方ないかもしれない。

勘違いの謎は解けた。だが、どうやってこの誤解を解けばいいのか私にはさっぱりわからない。

唸りながら説得方法を考えていた私を、隣にいた数学担当教諭が助けてくれた。

「須田は理系でしょう」

「え!？」

本気で驚いている現代文担当。

「そうなのか？」

今度は私に聞いてくる。そして一応頷いておく。

「数学は得意です」

「須田は数学の成績良いですよ」

答えておくと、数学担当がさらに太鼓判を押してくれた。実際、数学の成績なら学年五位圏内です。

「知らなかった……」

驚きながら私を見る現代文担当。

何だか複雑な気分になった、そんな進路相談だった。

さて、短大受験は成功し、短大で友人も出来た。離れ離れでも地味に付き合いのある友人である。

そんな短大の友人の一人にこう指摘された事があった。

「けいはさ、文系と理系の両方だよね」

今では、この回答が一番正しいように思う。

須田はレベルが上がった。

賢さが1上がった。

『文系』の称号と『理系』の称号を手に入れた。



続・転んでもタダでは起きあがらない

彼は予想外な心の傷を負っていた。

今回は珍しく続きもの。『転んでもタダでは起きあがらない』のその後についてです。

『転んでもタダでは起きあがらない』で見事に被災した川口さん。彼の被災話を聞きだそうと、プログラム開発の上司であり先輩である佐藤さんと食事をしようという話になった。

元々は男性の秋吉さんを巻き込んだ、男性二人・女性二人という食事会だったのだが、秋吉さんが急用で来られなかったため、川口さんを女二人で取り囲んで尋問しようということになった。ちなみに、食事はとんかつ屋でおこなうという、大変財布に優しい食事会だ。私の胃袋には大変優しくないが。

仕事が終わる、件のとんかつ屋に車で集合した私達は、とりあえず適当に食べ物を注文して雑談を開始する。

川口さんの出向先に新しく行くことになった新人 もとい、私が教育担当した問題児の話なんかをしつつ、本題の地震の時の話になった。

「そう言えばさ、どうして真っ先に山の上にある工場を下ったりしたの？」

佐藤さんが口火を切ると、川口さんはのほほんと苦笑した。

「あの時、お客さんと打ち合わせの予定があつたんですよ。あの時間だと電車でもう到着していたから、連絡取る必要があつたけど、電話がつかないじゃないですか。だから、合流場所のホテルに行つたんです」

なるほど、考えなしに自殺行為をしようとした訳じゃなかったらしい。しかし、その後はあまりにも川口さんだった。

「俺、地震でもものすごい動揺しちゃったもんですから、持ってきた電話が携帯じゃなくて内線の子機で、全然使えない」

思わず突っ伏したくなった。川口さんはカラカラ笑っている。

「でも、そこからが凄いですよ。RPGみたいな展開で」

「どういうこと？」

「まず、ホテルでお客さんと合流したら、ロビーを開放するから外に出るなって言われちゃって、一夜を過ごした訳です。次の日はお腹がすいたから近くの学校に行つて朝ごはん貰つたんですよ」

「びつくりするほど普通に過ごしてるね」

「俺の住んでたウィークリーのとこ、川の向こう側だったから思い

つきり津波で流されちゃったみたいですけどね。だから帰れないし、車も何か使えなくなってたから、普通に避難所に行ってました」

のん気すぎる。

「それで、避難所で飯食ってたら、女の子と会いまして……彼女も地元の人間じゃないって言う話だったから仲良くなったんですよ」

予想外のラブロマンス路線。

「二人で散歩していたら、裸にタオル一枚のおじいさんに会いました」

「ちょっと待て、脈絡が無さ過ぎる」

散歩していた川口さんは、裸のじいさんを拾った。おい。

「そのおじいさん、孫の家探してたんですけど、地震で景色が変わっちゃってどこかわからなくなっちゃったらしくって、一緒に探してあげたんです」

そこから人助けをしていたらしい。

「それで、孫の家に送り届けたら『恩人だから』って言って布団二組貰っちゃって」

恩人に布団を押し付けるといふ衝撃展開。

「その布団を避難所で使って、暖かく過ごしてました」

「……快適だった？」

「ええ！ でも、午後にもう一度散歩に行ったら平野さん達がいて、それで帰る事になっちゃいました」

そこまで話を聞いて、私は違和感に気づいた。

「でも、東さんの携帯に川口さんの携帯から電話が入ったから、二人は行ったんですよ……？ 川口さんの携帯ってどこにあったんですか？」

「ずっと工場のロッカーの中だったよ。鍵かかってたから誰も取れないはず」

「まさか……」

「混線でそんな電話が入っちゃったんじゃない？」

救出劇が成功したのは完ぺきに偶然の産物だった。

「で、出向先の人でも避難所に来てたらしいんだけど、俺があんまり楽しそうに女の子と話していたから話しかけられなかったんだってさ」

迷惑甚だしい話である。

「それで、その女の子の連絡先とかちゃんと聞きました？」

それだけ仲良くなっただったから、これを機会に捕まえてしまえ、と暗に言ってみると、川口さんは落ち込んだ。

「彼氏持ちだって会った最初に言われた」

失恋による傷心の方が予想以上に痛手だったらしい。

須田はレベルが上がった。

賢さが1上がった。

『人生はそうそう上手いかない』という教えを手に入れた。

天国みたいなお花畑を見たぜ（前書き）

食事中の方は読まない事をお勧めします。

## 天国みたいなお花畑を見たぜ

食後すぐに風呂に入ってはいけないというのはマジだった。

ついこの間の話である。

いつも通り夜に帰ってきた須田は、珍しく家のご飯にありつけるとうきうきしていた。

「たっだいま」

「おかえり、今日はサンマの塩焼きとサンマの刺身があるけど、どっち食べる？」

「刺身！」

迷わずに私は選択する。

サンマのような青魚は鮮度を保つことが難しく、基本的に焼いて食べる。しかし、港が近くにある様な環境のため、ごくまれに刺身で問題の無いサンマが手に入ることがあるのだ。そうすると、母は器用にさばいてくれる。本職もびっくりする速さなのだそうだが、母は山育ちである。

「ひさびさなれど、うまっ！」

脂ののったサンマの刺身に舌鼓を打ちつつ、私はテレビを少し見てから風呂に入って家のパソコンを使い始めた。

気が付けば十時ぐらいになっており、私がパソコンを開放すると姉が帰ってくる。

「ただいま」

「おかえり。じゃ、私はそろそろ寝るや」

言いつつ普段布団を敷いている部屋を見ると、何もない。

そう言えば来客があったから布団をたたみ、テーブルを出していたのだった。

「片付け片付け」

言いつつテーブルを邪魔にならない場所に運び出し、姉の分も布団を出す。現在、家にいる人間の数が多いため、私と姉は同じ部屋で眠っている。

「ふゝ、疲れた」

ちょっとした運動の後にパタリと倒れ込み、私は眠ろうと思った。しかし、何か気分が悪くて眠れない。

「姉ちゃん、何か気持ち悪い」

「ほいほい」

相手をしてくれない姉。仕方ないので私は吐き気と戦いながら目



を瞑った。

しかし、深夜十二時近くになっても眠れない。それに、何だかお腹がはっている。

仕方なく私はトイレに行くも、お腹のはりは取れない。

気持ち悪さから唸り声を上げてしまう事態になり、姉が心配してやってきた。

「どした？」

「ぎもぢわるい」

言いつつ、和式トイレだから行けないのかと思って私は一階にある洋式トイレに向かう。

あかりを点けつつトイレに足を踏み入れた瞬間、嘔吐。

生理的な涙でぐしょぐしょになりながら口をゆすぐ。

困った私はとりあえず副作用がまずありえないビフェルミンを  
もしやもしや食べ、お湯を飲んで眠った。しかし、何か頭がかゆい。  
一瞬意識が遠のき、再び意識が浮上した時に、私は気付いた。

「か、かゆい！　口までかゆい！」

ジンマシンだった。

「姉ちゃん、助けて！」

涙目に訴えると、姉はがさごそと荷物を探し始める。

「はい、これでも飲みな」

渡されたのはアレグラというアレルギーの薬。姉に頼むと大概の薬が出てくる。ドラえもんか。

「コレ飲むと副作用で眠くなるからな」

現在の時間は三時ぐらい。少し葛藤したものの、背に腹は代えられないので飲む。

一応体を洗い流そうとシャワーを浴び、私はようやく眠った。

次の日、朝八時に起きてしまった私はふと気づいてしまった。

ヤバイ、事務所の鍵あけ誰にも頼んでねえ。

鍵を持っている人間が少ない上に、コンスタントに出社するのは私以外いない。

ぐったりしつつもやむなく私は苦手な秋吉さんに電話する。

「もしもし。須田です」

「おはようございます！ どうしました？」

「すみません、消化不良とジンマシンが酷いので、事務所の鍵あけお願いしできますか？」

「鍵大臣ですね！ 任せてください！」

「お願いします」

意図的な秋吉さんのボケに突っ込む気力もなく、私は電話を切る。そして今度は事務所の方へと電話する。

本社に誰もいなくても、他の事務所の人が電話に出るはずである。

「はい、岡崎です」

お局様が電話に出た。ハズレかアタリか微妙なところである。

「もしもし。須田です。ジンマシンが酷いので、すいませんがお休みします」

「あら、わかったわ。お大事に」

「ありがとうございます。失礼します」

プツリと切って、私は息をつく。そして定年のため暇人な父にアクエ アスの購入を頼んで眠った。

しかし、昼になってもさっぱり良くならない体調。  
腹は痛いし、はるし、むしろ全身痛い。

「姉ちゃん、全然ダメなんだけど」

「お前の薬整理してたらこんなの出てきたから飲んでみれば？」

手渡されたのはナウゼリンという薬。

これは要約すれば整腸剤兼吐き気止めである。

「昨日のうちに渡せば良かったよなあ」

カラカラ笑う姉に軽く殺意を覚える。

「とりあえず飲んで様子見る」

言いながらナウゼリンを飲んだ後に私は再び眠った。しかし、眠り始めて二時間後、何かとても暑い。

異常を感じたため熱を測ってみると三十七度八分。三十六度が平熱だが、結構上がってきている。

「姉ちゃん、熱が出てきた」

「風邪っぽいな。病院行くか？」

「うん。でも、グラグラして運転無理」

「運転は代わるけど、家に誰もいなくなるなあ」

「母ちゃんが帰って来てから出発でいい」

そんなこんなで病院に行き「サンマのせいじゃないかなあ」と医者者に言われつつ薬をもらった。

そしておかゆを食べた後に処方された薬を飲んで眠る。

三時間後、起きた時に私は全く喋れなくなっていた。喘息で。

筆談で姉にアレグラを貰い、飲んでから再び眠る。喘息の症状は軽くなったのだが……

「姉ちゃん、ぎもぢわるい」

「薬さっぱり効いてないなあ」

私は吐き気と再び戦っていた。

「仕方ないなあ」

姉は横たわっている私の右側になると、左手をマッサージし始める。実はこの姉、鍼灸師の免許を持っていたりする。

「ああ、らく〜」

軽くお花畑を見ている私は、ここで調子に乗った。

「右手もお願い」

「あいよ〜」

しかし、右手をマッサージして貰っている途中で衝撃が走る。駆け込むトイレ。再びの嘔吐。さようなら、せっかく飲んだアレグラ。軽く泡立った水を吐きました。

「うわうう、もう、俺、ボロボロだようう」

涙でぼろぼろになりながら、私は顔をタオルでふく。布団に

戻ることすら億劫だ。

「左手は吐き気止めで、右手は逆だったんだねえ」

のほほんと分析する姉に殺意を覚える。

「どんどん〜……」

「ああ、ごめんごめん。腕はダメみたいだから足裏やってみよう」

そんな訳で、布団に戻った私は姉に足裏マッサージをしてもらうことになったのだが……

「いたいいたいいたいいたいー!!」

「はいはい、胃腸も腎臓もさっぱりうごいてないねえ」

「だから、痛いって、手加減をいたいいたいいたい」

姉が飽きるまで、この苦行は続いた。

そして、翌朝、何故か少しだけ回復しているのに、私は理不尽さを感じた。

須田はレベルが上がった。  
忍耐が3上がった。  
体力が2減った。

天国みたいなお花畑を見たぜ（後書き）

薬漬けは一週間続きました。

体調が微妙な時はやっぱり青魚に火を入れるべきだ。



## テレビをつけねば（前書き）

歴史好きと歴史嫌いとの間には、埋めがたい溝がある。

テレビをつけねば

年末です。

年末になると、どうしてこう忠臣蔵関連の番組が多いんでしょう。そんな、忠臣蔵にまつわる姉との会話。コタツに入ってるんびりしていた私に、姉はこう聞いてきた。

「どんちゃん」

「何？」

「新撰組ってさ、何かの門の前で太鼓叩いてるアレだよね？」

私は思わず片手で顔を覆った。

「それ、新撰組じゃなくて忠臣蔵。何で浪人の摘発前に太鼓叩いて知らせてるんだよ」

「あれ？ そうなの？ 新撰組と忠臣蔵って、そんなに違うの？」

のん気に姉はミカンをむきはじめる。それにならい、私もミカンをむきはじめた。

「そも、時代が違いすぎるだろ。百年以上差があるぞ」

「江戸時代だよねぇ？」

「江戸時代ってのは三百年近く続いている時代なんだよ！」

「長いねぇ」

ミカンを一切れ口に入れ、姉がもっしやもっしややりはじめる。

「長いよ。ってか、そもそも新撰組と忠臣蔵じゃ、やってる事も全然違うよ」

「えー？ だって、両方とも切り合いがあるじゃん」

「それで言ったら水戸黄門だって、遠山の金さんだって切り合いがあるよ……」

「ああ、そうだね。ってか両方とも実在するの？」

「実在するわああ！ ドラマが脚色だらけなだけで、人間はいたんだよ、昔……」

説明が脱線しまくる。

「忠臣蔵は仇討あだうち 復讐の話なの！ 新撰組がやってるのは浪人の摘発だから、警察がテロ組織捕まえに行ってるのと大差ないの！」

自分で言っていて何だが、噛み砕き過ぎて原形を残していない説明な気がする。

「じゃあ、なんで復讐してんの？」

忠臣蔵の動機って、説明しづらいものの要求を……。私は少し考えてから話し始める。

「えっとね、昔、株式会社赤穂あしひがあつたんだよ」

置き換えて教える事にしました。

「その社長の浅野さんは、すごく偉い人から天皇の接待を命じられてたわけね。で、天皇の接待には作法があつたから、その作法を浅野さんに吉良さんが教えていたんだよ。だけど浅野さんが吉良さんに賄賂を贈らなかつたから、吉良さんは浅野さんを地味に苛めたのよ」

「え、贈賄で捕まるじゃん」

「捕まらない時代の話だからそこはスルーしろ。それで、浅野さんは怒って刀抜いちやいけない場所で吉良さんに切り掛っちゃったんだよ。で、浅野さんは法律違反で切腹の上に、会社倒産させられちゃったのよ。で、会社で働いている人たちがいるじゃない？ その

人たちは路頭に迷うの。もとをただせば吉良さんが社長を苛めたせいで。で、まあ、色々あつて最終的にその路頭に迷わされた社員達  
が、社長の恨みを晴らすために吉良さんを殺しに行く話だよ」

「メチャクチャ殺伐としてるね」

「武士の話だからね。まあ、戦国時代よりはマシよ？」

「なるほどお。で、何で太鼓叩いてるの？」

「知るか」

ドラマの演出だと思う。

須田はレベルが上がった。

賢さが1上がった。

謎の比喻表現を手に入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9467/>

---

ポレポレ物語

2011年12月19日20時59分発行